

---

外事警察 CODE:ジャスミン

麻生 幾



幻冬舎文庫



外事警察

CODE: ジャスミン

## 主な登場人物

住本健司

元・警視庁公安部外事第3課

作業班班長 警部補

金沢涼雅

元・警視庁公安部外事第3課

作業班員 警部補

松沢陽菜

警視庁公安部公安総務課第6担当部門 巡査部長

倉田俊貴

警察庁協力者獲得工作作業指導本部（ZERO）本部長 警視正

有賀正太郎

内閣官房副長官補

カリン

日系パキスタン人（姉）

ジャスミン

日系パキスタン人（妹）

J・シンプトン

FBIテロ対策部門チーフ・ユニット

リュ・ドヨン NIS第7局対北調査局作戦班長

正岡剛也 小説家



目次

謝辞	エピソード	作業 V	作業 IV	作業 III	作業 II	作業 I	プロローグ
314	311	239	192	160	89	13	9





## プロローグ

「どっからかけている？」

報道センターの当直デスクはまずそれが気になった。

「日比谷公園の中です」

十名の事件記者を束ねるキャップの言葉に、当直デスクは満足した。

警視庁記者クラブの民放テレビ局にあってがわれた各ブースは、それぞれの壁が密接しており、囁き声ささやさえ漏れてしまう場合もあるからだ。

「で、ブツはあるんだな？」

当直デスクは、携帯電話にそう囁くように聞きながら立ち上がり、膨大なパソコンディスプレイの眩い光まばゆに溺れる、薄暗い報道センターの隅へと足早に向かった。

「ええ、もちろん」警視庁キャップの声はさらに低くなった。「ネット上に流出しているも

のをすべてコピーし、接写もしました。メールで送ります」  
キヤップの押し殺した声が、デスクの興奮をさらに高めた。

「他局がネット上への流出に気づいていないという確認があるのか？ それと、肝心なことだが、裏付けはとったのか？ 本当に、本物なのか？」

仲間の視線にさえ注意しながら当直デスクが畳みかけた。

「すべての答えは、イエス、です。担当記者は、二本の線から確認を取っています」

キヤップの言葉は自信に満ちあふれていた。

だからこそ、腕時計を見つめた当直デスクは悩んだ。

午後十一時五十二分――。

今夜のニュース枠はすでない。

ただ、ニュース速報という手はある。

しかし、キヤップが判断し、決断して伝えてきた、これだけのでかいネタである。テレビのニュースとしては大舞台である昼のニュースでこそ、もつとも相応しい。時間枠も大幅にとれるのだ。

「明日の昼までもつか？」

当直デスクが急いで訊いた。

「正直、分かりません」

キヤップが神妙に言った。

携帯電話を握ったまま当直デスクは決断した。

他局の動きが気になる。トップで扱うべき超弩級どきゆうのネタなのだ。

「よし、昼のニュースでオンエアだ！」デスクは低い声で言った。「最初の五秒で、各局がトップでやってないとわかったら、スクープとうつ！ で、絵は何が使える？ もちろん、流出した膨大な機密文書は、ドサツと並べる。それ以外の絵は？ よし、それでいい！」

「では、原稿は、ラインは使わず、こっちでプリントアウトして、ファックスで送ります。その直前に電話をしますので、待機しててください」

キヤップの手筈てはずの良さに、スクープをうつ時にいつも反応する、大腿部だいたいの神経のしびれを、当直デスクは今回はより強く感じた。

「記者クラブのブースから中継だ、(記者の)顔出しでやる！ ただし、朝駆けで公安部長にはあてろよ。警察庁サッチョウの警備局長には、放映直前、オレが仁義を切る」

さらに幾つかの細かい指示を送った当直デスクは、報道センターに戻った。

編集スタッフと立ち話をしていて、すべてのニュースを統括するニュースデスクの姿を見つけると、目配せで廊下へ連れ出した。清涼飲料水の自動販売機の前に、あえてゆっくりと

12  
歩み寄ったニュースデスクの表情は、すでに緊張していた。

「スクープか？」

その雰囲気を感じたニュースデスクが周りを気にしながら小声で訊いた。

「途轍とてつもなく——」

自動販売機にコインを入れながら、当直デスクが囁くように言った。

概要を聞かされたニュースデスクは、驚きの声を上げないよう苦勞しなければならなかった。

「昼のトップはもらいますよ」当直デスクは、ペプシ・ゼロのペットボトルを取り出しながら続けた。「それまで、情報管理を徹底して、社内的にも公表しないでください。ラインナップには、『社会部独自ネタ』のみの表記で、内容はカラのまま置いておいてください」

ニュースデスクは力強く頷うなずいたあとで、呟つぶやくように言った。

「それにしても、今の話、信じられんね」

「ええ、まったく。前代未聞の事件です」

当直デスクの興奮を抑えた言葉に、ニュースデスクは満足そうに頷いた。

## 作業 I

二〇一〇年十一月

東京・千代田区霞が関 警察庁

「警察資料とは認めない。それが妥当であると存じます」

倉田俊貴くらたとしたか警視正はそう言つて、楢田形だえんの会議机を取り巻く男たちを見渡して続けた。

「よつて本会議の内容もまた、情報公開法には相応しくないのでありまして、情報公開法に基づくりストの表現についても『分析』とのみ表記し、番号のみ追記すべきであると——」

会議机の背後でパイプ椅子に座る松沢陽菜まつざわひな巡査部長こそ、特別な思いで倉田の言葉を聞いていた。倉田の判断に陽菜も賛同していた。もし流出した資料が警察のものだと認めれば、その中に含まれる協力者リストも事実だと証明することになる。そうなれば、協力者の生命にかかわることにもなるからだ。

民放テレビ局のスクープ最初の報道が一週間前になされた直後、一部の者たちは「あり得

ない！」という言葉は何度も口にした。公安部の多くの者たちは、「外事警察は、何事も『ソトゴト』であって、緊迫感がないからこんな事件が起きた」と嘲笑した。またある者は、「気取った外事の野郎たちの中でも、素人ばかりを集めた外事第3課だからこそ起こった」と嗤笑した。早い話、公安部全体に対するダメージを心配するよりも、外事警察の大失態に喝采を送ったのである。

ここに集まった最高幹部たちにしても、彼らと本質は変わらない。警察組織への影響はもとより、現場警察官の任務にいかなる支障を来すのかという現実的な危機管理はどうだつていい。いかにしてこの事態を収束させ、誰が責任を問われるべきかという被害管理への思考を誰もが巡らせている——陽菜はそう確信していた。

しかし、その一方で、陽菜は不気味な感触からずっと逃れられずにいた。「犯人」の思惑と狙いはどこにあるのか、ということである。

これまでも内部資料がネットに流出した事件は何度かあった。しかし、そのほとんどは、規則に違反して自宅で作業するために外部メモリーなどにコピーして持ち帰り、自分のパソコンで作業していたところ、そのパソコンにダウンロードしていた画像交換ソフトがウイルスに感染しており、それによって資料が流出するというパターンだった。私的に外部へ持ち出すことじたいが規則違反ではあったが、流出じたいは故意ではなかった。

今回の場合も、最初はそれが疑われた。いや、それは幹部たちの「希望」だった、と陽菜は思った。

だが、その「希望」は脆くも吹っ飛んだ。もし「故意でなかった」場合、共通したある特徴があるべきところ、それがなかったからだ。

「ウイルスの感染によるこれまでの流出のケースでは、パソコン内のあらゆるものを流し出してしまふ。パソコン内にあった、ワイセツ画像なども同時に流出しております」

倉田が続けていた。

「しかし本件では、機密資料が含まれたフォルダだけが流出しました。しかもそのフォルダの名前は——」

倉田は言葉を止めたが、視線はそこへは向けなかった。そこにいた誰もが露骨な視線を浴びせることはなかった。

陽菜は、その男の背中を見つめた。警視庁公安部長の石山隆警視長は、腕組みをしたまま虚空を凝視していた。流出した資料は、一つのフォルダの中に収められていた。そのフォルダの名前は、〈石山隆〉となっていたのである。さらに、その後の捜査で、ネットへの流出は海外の複数のサーバーを経由しており、その行方が追跡できないことも明らかとなった。つまり警察内部の犯人が、意図的に、強い意志をもって流出させたことが明白になったので

陽菜は、クリアファイルに挟んだ資料の中から、一枚のプリントアウトされたばかりのNHKのニュース記事を取り出した。

「警視庁公安部のものとみられる国際テロに関する内部文書がインターネット上に流れていることが警視庁への取材で分かりました。警視庁が調査している問題で、流出したとされる文書の中には、国際テロの捜査の協力者に関する秘匿性が高い情報が多く含まれているということです。」

関係者によると、インターネットに流出したとされる文書は、数百点以上に上り、なかには、国際テロの捜査の協力者の詳しい状況などが記された文書のほか、海外の治安機関からの要請とみられる極秘文書もあるとされています。

また、外国の大使館の情報、日本に住む複数のイスラム教徒の個人情報や動向、テロの対策や捜査にあたる警察官の名前や家族の状況、それに、日本で開かれた国際テロ対策に関する会議の内容など、流出した文書には秘匿性が高い情報や個人情報が多く含まれているとの情報もあります。



警視庁は、「文書が警察で作成されたものかどうかや、どこから流出したのかについては調査中だ」としてはいますが、今後、日本で開かれる数々の治安会議への影響が懸念されています。

会議机に視線を戻した陽菜は、大きくため息を吐き出した警察庁長官の谷川俊治たにがわしゆじの肩を後ろから見つめた。谷川は、長官を退任後、官僚の最高峰である事務担当の内閣官房副長官を目指すとも言われている。今は、まさに晩節を汚す思いで一杯かもしれない、と陽菜はふと考えていた。

そんな谷川を始めとする警察庁の最高幹部たちは、マスコミへの広報では、警察資料かどうか精査中、としながらも、警視庁公安部の中に極秘にチームを編成し、徹底した捜査を命じたのである。

捜査の主体モトグチとなったのは、流出元の外事3課ではなかった。それどころか外事警察は完全に外された。外事警察と張り合う国内を担当する公安かんの部門にその任務が下った。

警察庁警備局は、外事警察とはまったく関係のない部門による捜査でこそ、身内かほを庇うことなく、犯人を突き止められる、と期待したのである。その結果を公表するのかどうかは別

しかし、その方針が自らの運命まで左右することになるうとは、陽菜は、想像もしなかった。外事3課の陽菜が異例の人事措置で、倉田の直接指揮下にある、警視庁公安部公安総務課「第6担当部門」に配置されたのである。

第6部門という組織が、あらゆる事件や事象を担当する、いわば特命班であることを知ったのは配置されてからのことだった。

直属の上司と紹介された「指令」という肩書きの男からその任務を命じられたとき、陽菜に特別な感傷はなかった。かつての仲間について、調査するという躊躇ためらいはまったくなかった。

淡々として捜査を進め、聴取と証拠によって突き上げ、*流出者X*をひたすら追及する――ハンティングにも似た思いに正直、快楽を覚えた。だからこそ、第6部門の上司である指令の、竹内政巳たけうちまさみ警部が、元の仲間たちへの遠慮があるかもしれない、と陽菜のチームへの編入に反対したときも陽菜は引かなかつた。かつての経歴を逆手に取り、外事3課にいたからこそ、自分の人脈が役に立つはずであり、また一人ひとりの顔色で正確な供述をしているか否かが分かる、と強引に説得した。

事件化に至るまで数年を要することが多い外事警察や公安警察の世界に入って、初めての

経験に素直に打ち震えたのだ。

陽菜は、第6担当部門に、四つ編成された班の一つに組み込まれた。流出した資料の分析からの突き上げ作業だった。

その結果が、今、陽菜の膝の上にある。

すべての事実を総合して導き出した結果は、陽菜でさえまったく想像もしていない内容だった。しかも、陽菜自身にとってこそ余りにも衝撃的だったのである。

「詳細は、松沢巡查部長から報告させます」

倉田が椅子に腰を落としながら陽菜に頷いた。

パイプ椅子から立ち上がった陽菜は、膝のクリアーファイルを椅子の上に置いた。見るまでもなかった。すべては頭の中に入っていた。

だが、胸の鼓動をはっきりと聞いた。会議机の男たちに聞こえないように祈った。

普通ならば、こういった席に呼ばれることはあり得ない。警察庁長官や警備局長と直々に言葉を交わすことも考えられない。すべては、倉田の「演出」に従ったものだが、余りの緊張でさっきから大腿の内側の神経が軽い痙攣けいれんを起こしていた。

「結論から先に申し上げます。流出文書のうち書きかけの文書——。その存在に重大関心を寄せました」

陽菜は、そう言って会議机を取り巻く男たちを胸を張るようにして見渡した。  
倉田が目配せだけで先を促した。

「流出した資料は様々な範囲にまで及んでいます。分析の過程で、ある不可思議なことに注目しました。流出した文書の幾つかが未完成のものであったり、誤字や脱字が散見された、という事実です。報告書のたぐいにして、その一部が書きかけのもので、報告書の体をなしていないものでした」

陽菜がふと横へ視線をやると、倉田が、背後のパイプ椅子に座る部下たちと囁き合っているのが目に入った。

「そして、公安総務課員による外事3課員からの聴取報告書との照合を実施しましたところ——」

陽菜は言葉を切って、幹部たちを見渡した。警察庁上層部はあくまでも、本件は「事件」ではなく「調査」であることばかり、「横書き」の聴取報告書とするように命じたのである。  
「——さらに新たな事実に行き着きました。外事3課では、キユウサン『個人用のパソコン』は持ち込み禁止。『支給されたパソコン』のみで課員たちは仕事をし、インターネットと繋つなげることも厳禁とされています。しかも課員たちは、『支給されたパソコン』を使う場合にしても個人個人に与えられたIDをまず入力し、指紋認証も受けるという煩雑な手続を行って初めて